ＡＩ博覧会　Summer 2025　8.27～28

於　東京国際フォーラム

さる8月27日から28日にかけて、恒例のＡＩ博覧会(夏)が東京国際フォーラムで開催された。生成AI 関連の催しは、相変わらず、押すな押すなの賑わいで驚かされる。
これも生成AIの話題性と同時に、技術変化の速さが人を集める理由だろう。
期間中の来場者は初日から5,000名を超える来場者を迎え、2日間で合計10,000名を突破したそうである。
28日に開催されたセミナー1～6を聴講したので報告する。

【セミナー1】　10:00～　ニッポンの生成AI開発力強化と国際競争戦略
【講師】　経済産業省　AI産業戦略室 室長　渡辺 琢也 氏

【講演要旨】

日本は生成AIを活用し付加価値を高める必要がある。事業会社が自らソフトを作り、効率化だけでなく価値創出を目指す時代へ変わった。人材育成やAIガバナンスも重要な課題だ。 領域特化型AIやPhysica AIの開発が社会課題解決の鍵となる。

【講演内容】

本セミナーでは、AI技術の進展とそれに伴う社会構造の変化について、具体的な事例とともに解説が行われた。**情報処理によって新たな価値が創出される**という視点が全体の基調である。**AI革命とは、大量のデータを適切に処理することで、効率化を可能にする技術革新である。**

従来は技術がニーズに追いつかなかったが、現在はニーズが技術に追いつけない状況となっており、社会の構造的な転換が求められている。

日本のデジタル赤字は4兆円に達し、昨年から1兆円増加している。人口減少に伴う生産人口の減少に対しては、付加価値の向上によって対応するしかなく、その手段として生成AIの活用が不可欠である。これまで日本では生成AIを抑制的に扱ってきたが、今後は積極的に推進する方針へと転換され、その一環として**生成AI活用推進法**も制定された。
このように、制度面からもAI活用が後押しされる体制が整いつつある。

従来のAI・DX推進では、事業会社がソフトウェア開発コストの抑制を重視していたため、ベンダー企業は利益が低い構造に置かれていた。今後はこの構造を見直し、**事業会社自らが**ソフトウェアを開発し、**デジタル技術を主体的に活用する時代が到来する。**

米国ではサービスや品質向上のためにソフトウェアを開発するが、日本では作業効率やコスト削減が主目的となっており、この認識の違いはソフトウェアの価値に対する再評価を促す。事業会社が主体的にソフトウェアを開発する流れは、すでに一部で成果を上げている。
例えば、サイバーエージェントでは、生成AIを活用してデザイナーが一人でキャッチコピー、写真、画像レイアウトまで制作できるようになり、生産性は30本/人から170本/人へと大幅に向上した。
このような変化に対応するためには、全社員に対するリスキリング（再教育）が不可欠である。AI導入は「検討→導入→拡大→駆使」という段階を経るが、日本はまだその半ばにある。DX推進においては、**人材育成の対象がプログラムを作る人から、デジタルを駆使して新たな価値を創出する人材へと変化している。** これに伴い、教育コンテンツや情報処理技術者試験の内容も見直す必要がある。
今後の企業活動においては、利益の源泉となるデータの定義と活用方法が重要な検討課題となる。この課題に対応するためには、変革を推進する人材の育成が急務である。
また、AI活用におけるガバナンスも重要な課題であり、民事責任の管理はユーザー側・提供側双方に求められる。
さらに、Physica AIの開発推進も必要である。サイバー領域だけでは社会課題の解決は困難であり、領域特化型AIの開発とフロンティア領域への挑戦が今後の鍵となる。
以上のように、AI技術の進展は単なる効率化にとどまらず、社会構造の再設計を促すものであり、その活用には制度、教育、人材、倫理の各側面からの総合的な対応が求められる。

【セミナー2】　11:00～　AI時代のリスキリング ～
スキルベース組織が創るキャリアの未来
【講師】　ジャパン・リスキリング・イニシアティブ　代表理事　後藤 宗明 氏

【講演要旨】
リスキリングは個人努力でなく組織責任。事業戦略としてスキル可視化と再配置が重要。
AIが業務をスキルに分解し、スキルベース組織への移行がDX成功の鍵となる。
AI時代の人材は創る人・使う人・使われる人に分かれ、学際的スキルが求められる。
【講演内容】
本講演では、AI時代における人材戦略とスキルの再定義について、具体的な課題と展望が示された。特に「スキルの可視化」と「デジタル＋グリーンリスキリング」の必要性が強調されていた。技術革新により69万の新たな職が創出される一方、86万の職が消失すると予測されている。この変化に対応するには、従業員のスキルを再構築する「リスキリング」が不可欠である。**リスキリングは個人の努力ではなく、組織が責任を持って推進すべきだ**との指摘がなされた。特にリーダーが主導し、事業戦略上の必須事項として位置づける必要があるとされた。リスキリングはリカレント教育やライフロング教育とは異なる、企業主導の再教育である。海外では企業がデジタルリスキリングを実施し、配置転換を通じてDXの成功につなげている。今後は学歴に依存しない「スキルベース

組織」への移行が不可欠となると考えられている。スキルポートフォリオの整備や外部労働市場との一元管理が求められる時代に入っている。
人事組織構造はメンバーシップ型からジョブ型、さらに**スキルベース型へと変化**してきた。これに伴い、管理単位もジョブ単位からスキル単位へと移行する必要があるとされている。ジョブをスキルに分解し、社内の適切な部署に配置することで能力の最大活用が可能となる。AIの活用により、業務のスキル分解と可視化が進み、配置の最適化が現実的になっている。今後の人材は「AIを創る人」「AIを使う人」「AIに使われる人」に分類されるようになる。**特に「AIを使う人」には、狭い専門知識ではなく、学際的なスキルや教養が求められている。**2つ以上の専門性を持つことが、AI時代における人材としての競争力を高める鍵となる。
以上のように、スキルの再定義と組織構造の変革が、今後の人材戦略の中心となる。

【セミナー3】　12：00～　【8月 最新版】『AI社員』の業務風景をデモでお見せします
【講師】　JAPAN AI 株式会社 CMO　飯田 海道 氏

【講演要旨】
AI活用は第3段階へ進化。AIエージェントがツールを使い業務を遂行する時代が到来した。API連携と業務プロンプトで機能別エージェントを構築し、社員化・組織化が可能になった。 AIにデータ作成を任せる流れが加速し、今後は、**AIトランスフォーメーション(AIX)**が鍵となる。
【講演内容】
本講演では、AI活用の進化と業務構造の変革について、第3段階に入った現状が示された。現在は「**AIエージェント」の登場により、AIが自らツールを使って業務を遂行する**段階にある。従来のAIは補助的な役割にとどまっていたが、今後はAIが業務の主体となる構造が進展する。講演では「AIに慣れる」「AIを社員化する」「AI社員を増やす」という概念が紹介された。これは、**AIを単なるツールではなく、業務を担う“仮想社員”として位置づける考え方である。**その実現には、機能別のAIエージェントを設計し、業務に応じて適切に配置する必要がある。
AIエージェントの構築には、API連携可能なツールの選定と業務プロンプトの設計が重要となる。これにより、簡易なAIエージェントを作成し、業務フローに組み込むことが可能となる。複数のエージェントをワークフロー上で連携させることで、より複雑な業務にも対応できる。
プロンプト設計においては、間違いやすい点、注意点、使いやすさの観点が重要となる。今後は、データ作成業務にもAIエージェントを活用し、AI自身がデータを生成する方向へ進む。**この流れは「AIトランスフォーメーション」と呼ばれ、今後のキーワード**として注目される。

【セミナー4】　13：00～　生成AI大賞2024受賞企業のライオンとNECビジネスインテリジェンスが語る。業界を変える生成AIの価値創造事例
【講師】　Generative AI Japan：漆原 茂 氏
NECﾋﾞｼﾞﾈｽｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝｽ：若林 健一 氏　　ライオン： 山岡 晋太郎 氏

【講演要旨】
生成AIは業務改革の中心技術。事業会社が主導し、AIエージェント活用が進む段階にある。 完璧を求めず試行錯誤で品質向上し、教育・組織設計もAI前提で再構築が必要となる。 社会的教育と人間の役割再定義が急務。貢献実感のあるAI共存型社会が求められる。

【講演内容】
本講演では、生成AIの実用化とAIエージェントの導入がもたらす業務構造の変化について、複数の企業事例を交えながら議論が展開された。技術の進化と組織対応のギャップが浮き彫りとなった。漆原氏は「**ChatGPT＋RAGはすでに少し古くなった**」と述べ、AI技術の進化スピードの速さを指摘した。
山岡氏は「AIを使わない選択肢はない」と明言し、経営トップのフルコミットが不可欠と強調した。同社ではすでにDifyやAIエージェントの導入を開始しており、現場での実証的な取り組みが進んでいる。
若林氏はAIエージェントが抜本的な業務改善につながるとし、約70のプロジェクトで活用しており、同社では、社員6万人のバックオフィス的な業務をAIエージェントが支援する体制を構築している。
山岡氏は「一人ひとり丁寧に対応しなければ、抵抗勢力が増える。」と現場対応の重要性を語った。生成AIは社会を変える技術であり、すでに実際に動いているが、安全性や信頼性への懸念も残る。
若林氏は「いきなり高性能は出ない。やりながら改良する。完璧を求めず一定品質を目指す」と述べた。
山岡氏は「現場と遊離しているのではないか」と自問しつつ、試行錯誤型の導入を進めている。
若林氏は「生成AIはコストがかからず、何度でもやり直せる。ROIを考える必要がない」と利点を強調した。
山岡氏は「ベンダーよりも事業会社の方が問題を抱えている」と、現場主導の課題解決を訴えた。
若林氏は「**生成AIのノウハウは世の中にまだ存在しない。自分で考えるしかない。**」と述べた。
また「本当に課題を解決できるのはコンサルではなく、現場の当事者である」との認識が示された。
漆原氏は「今後どのように進めるか」と問いかけ、今後の方向性に議論が移った。
若林氏は「**社会的な変革が起きる。教育から考え直さないと不要な人間を大量に生む**」と警鐘を鳴らした。「人は貢献実感がないと生きられないのではないか」と、人間の役割と価値の再定義を促した。

山岡氏は「取りこぼしが出ないような教育が必要。生成AIの使い方が鍵になる」と述べた。**今後の組織設計は「生成AIありき」で構築すべきであり、生成AI技術を前提とした人材戦略が求められる。**
以上のように、**生成AIの導入は単なる技術革新ではなく、組織構造・教育・人間の役割にまで影響を及ぼす社会的変革であり、企業はその本質を捉えた対応が求められている。**

【セミナー5】　14：00～　中小企業のAIエージェント戦略。
組織論から考える人材育成勝筋
【講師】　生成AI活用普及協会：小村 亮 氏　AICX協会：小澤 健有氏
株式会社KIZASHI 松岡 義太郎 氏

【講演要旨】
AIエージェント時代ではプロンプト不要。暗黙知の言語化・データ化が中小企業戦略の鍵。 技術者はAIアーキテクト等に分類され、配置と教育が重要。AIスキルは作る人と使う人に分化する。 **生成AIの出現により人間が本来すべきことに注力すべきだ。**
AIは標準化され、誰でも使える時代となる。
【講演内容】
本講演では、AIエージェント時代の到来と、それに伴う人材戦略・業務設計の変化について具体的な展望が示された。AIの進化が業務の根本的な再構築を促す段階に入っている。
従来はプロンプトを手動で設計する必要があったが、AIエージェントの登場により、その必要性は薄れつつあり、業務自動化の精度と速度が大きく向上している。
これまでの人材育成は、個々のスキル向上を目的としていたが、今後はベテランの暗黙知をAIに実装することが重要となる。知識を言語化し、データ化することが鍵となる。
ただし、AIが同じような回答ばかりを出す危険性も指摘されており、その対策としてAIのチューニングが不可欠である。多様性と柔軟性を持たせる設計が求められる。
AIを当たり前の業務ツールとして使える環境を早期に整備することが、企業競争力の基盤となる。技術者はAIアーキテクト、AIプロフェッショナル、AIビルダー、AIユーザの4分類に整理される。誰をどこに配置し、どのように教育するかが、AI時代の人材戦略の成否を左右する。
特に中小企業においては、暗黙知の言語化・データ化とAIへの実装が戦略の中心となる。
中小企業の人材育成は、AI環境の変化に応じて柔軟に対応する必要がある。
AIスキルは「作る人」と「使う人」に二極化し、使い方は今後さらに簡易化されていく。
AIリテラシーも多様化し、導入のハードルは下がり、標準化が進むと予測される。
そのため、**最新技術の追求よりも、人間が本来担うべき役割に注力することが重要**となる。
以上のように、**AIエージェントの普及は業務の効率化だけでなく、人材配置や教育方針、企業戦略そのものに影響を与えるものであり、今後の組織設計に不可欠な視点**となる。

【セミナー6】　16:00～　生成AI開発動向と国産生成AI基盤モデルの活用
【講師】　株式会社 Preferred Networks　事業本部長　岡田 利久 氏

【講演要旨】

生成AIは急速に普及。今後は高品質な少量データと強化学習で性能向上を図る必要がある。 AI推論の計算量は爆発的に増加。**日本は特化型AI活用が遅れ、**トップダウンの推進が求められる。

国産技術も進展中。MN-CoreやPLaMoなどが高効率・高性能な日本語生成AIとして注目される。

【講演内容】

本講演では、生成AIの急速な普及と、それに伴う技術的・社会的課題について話があった。

生成AIの利用人口はわずか3か月で3億人増加し、世界的な関心の高まりが示された。

この急成長の一方で、**AIに学習させるデータの枯渇という新たな課題**も浮上している。

インターネット上の知識はほぼ学習し尽くされ、今後は**少量でも高品質なデータの確保**が重要となる。

小規模なデータでも性能向上を図るため、強化学習の活用がさらに進められている。

実際に、難解な数学問題や古代文字の解読（例：パルミラ文字）にも応用が始まっている。

大規模言語モデルの構築に必要な計算量は、5.5か月ごとに2倍、1年で4.6倍に増加している。**AI推論の需要は爆発的に増加しており、計算量は80倍に達する見込みである。**

AIを「使う」ことと「作る」ことでは、必要な計算資源が桁違いであり、使用するGPUの性能も異なる。GoogleなどがAI検索サービスを開始したことで、AEO（AI Engine Optimize）への対応も求められる。

AIエージェントの開発動向としては、AIワークフローとの連携が重要なポイントとなっている。

生成AIの活用状況を見ると、日本は60％にとどまり、他国の80％以上と比較して効果が出ていない。**日本の弱点は、特化型AIの活用が遅れており、チャット的な使い方に限定されている点**にある。この状況を打破するには、トップダウンによる戦略的な推進が不可欠である。

国産基盤モデルとしては、弊社PFNが複数の製品を開発しており、注目を集めている。

低消費電力チップ「MN-Core」は、深層学習の行列演算処理に特化し、実行効率を最大化する設計になっている。また、小規模LLM「Plamo」は、SLMとして世界最高レベルの日本語生成性能を誇っている。

以上のように、**生成AIの進化は技術・制度・人材の各側面での新たな対応を求める段階に入っている。**

【セミナーまとめ】

・生成ＡＩは効率化から価値創出へと進化し、事業会社主導の活用が本格化している。

・ＡＩエージェントが業務を遂行する第3段階に入り、ＡＩエージェントの社員化・組織化も現実的に なった。

・プロンプト不要の時代へ移行し、暗黙知の言語化・データ化が中小企業戦略の鍵となる。

・ＡＩトランスフォーメーションが進み、教育・組織設計もＡＩ前提で再構築が求められる。

・ 人材は創る人・使う人・使われる人に分化し、学際的スキルと再配置が重要となる。

・スキルベース組織への移行がDX成功の鍵で、リスキリングは組織責任として戦略化される。

・日本は特化型ＡＩ活用が遅れ、検索用途に偏重している。トップダウンの意識改革が必要とされる。

・人間の役割再定義と社会的教育が急務になっている。ＡＩ共存型社会への移行が次の課題である。

以上